日本雪工学会誌
J. of Snow Eng. of Japan
Vol.39 No.1, 34-37, Jan. 2023

第37回雪シンポジウムin南魚沼　開催報告

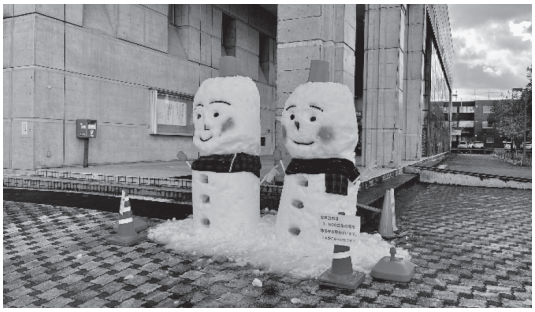
Report of the 37th Snow Symposium in Minami-Uonuma

富　永　禎　秀[*1]・瀬　戸　民　枝[*2]
Yoshihide Tominaga　　Tamie Seto

1. はじめに

「雪シンポジウム」は，雪国の安心で豊かな暮らしの創造を目指して，新潟県内各地の自治体が抱える問題を民・産・学・官が一緒に考える機会として，本会上信越支部と県内自治体とが共催で開催しているもので，今年で37回目を迎えた。本年は，国内有数の豪雪地帯であり，日本一とも評価を受ける「南魚沼産コシヒカリ」の産地としても知られる南魚沼市での開催となった。このコシヒカリは，言うまでもなく，雪がもたらす清らかな水と盆地ならではの昼夜の気温差によって育まれるものである。また南魚沼市は，10ものスキー場を有するウィンタースポーツの盛んなまちとしても知られる。また南魚沼市では，コロナ禍による無観客措置によって当初の目的を達成することは叶わなかったが，東京オリンピック・パラリンピック会場での雪冷房体験に取り組むなど，雪を活用したまちづくりに積極的に取り組んできた。今回のシンポジウムは，「雪国からの貢献」をテーマとして，「利雪」を通じた地域産業の育成，そして「脱炭素社会」への貢献に焦点を当てた。

シンポジウムは，令和4年11月14日（月）に，南魚沼市民会館を会場にして開催された。当日は，業界関係者，行政担当者，市民等405名のご参加をいただき，大変盛況であった。以下にその概要を紹介する。なお登壇者の都合により，当初のプログラムから急遽，基調講演とパネルディスカッションの順番が変更された。



会場入り口におかれた雪だるま
（雪室で保存された昨冬の雪を使用）

会場内の様子

林茂男市長（実行委員長）の開会あいさつ

2. パネルディスカッション「雪国からの貢献」

コーディネーター：上村靖司氏
（長岡技術科学大学 教授，日本雪工学会 会長）
パネリスト：小泉進次郎氏
（元環境大臣 衆議院議員）

＊1　新潟工科大学（上信越支部・支部長）
＊2　新潟県魚沼地域振興局（上信越支部・副支部長）

高橋　悟氏

（一般社団法人ゆきぐに利雪振興会 代表理事）

今成要子氏（山家漬本舗 今成漬物店）

内山治彦氏（株式会社内山肉店 代表取締役）

林　茂男氏（南魚沼市長）

まず地元で活動する3名のパネリストから，自己紹介と利雪に関わる取り組みの紹介があり，その後，林茂男市長および小泉進次郎氏を交えたディスカッションを行った。以下は各氏の発言の抜粋。

高橋悟氏：雪国利雪振興会で目指すのは雪の利用の普及と環境教育の二本立て。毎年約1200トンの雪山を作っている。東京オリンピックでの雪提供に向けて万全の準備をしていたが，延期そして無観客となり断念した。しかし南魚沼市のワクチンの大規模接種会場で雪冷房を行うことができた。また2019年と2022年に環境省の熱中症対策実証実験に手を上げた。南魚沼の雪を詰めたスノーパックを配ったり，埼玉のサッカースタジアムとさいたまスーパーアリーナの付近でも雪による冷熱源を供給したりした。他方，雪の活用を次世代につなぐために，積極的に教育現場のお手伝いとして，市内の小中学校，高校，大学にも出前授業をしている。

今成要子氏：今成漬物店は漬物屋，粕漬け屋である。酒粕は八海山という地元の銘酒の特別良い酒かすを分けてもらい，そちらで昔ながらの製法を守って漬物をつけている。私どもの漬物の特徴としては，昔ながらの木桶で土蔵の中で熟成させるという，手間も時間もかかるやり方だが，長い間それを繰り返し今日までやってきた。この地域は本当においしいものであふれているが，自慢もせず新潟県人らしく，自分たちだけでおいしくいただいてしまう。大変もったいないと思う。雪もそうだが，食べ物にしても実はとても魅力あるものがあるので，これからちょっと方向を変えて，もう少したくさんの方に知ってもらうようにしていきたいと思っている。特に雪国の食文化にはいつも考えさせられるところがある。私たちが当たり前に食べているものが，実は他の地域にとって驚きであるという経験を何度もしている。他県の方，海外の方と話をすると，すごくいい反応が返ってくる。当たり前に思っていたことに実はすごいものがあるのだっていうことに気づかされている。

パネルディスカッションの様子

内山治彦氏：雪を活用した新しい食肉文化の創造開発を目指して事業に取り組んでいる。昨年7月に食肉専用の雪室を併設した工場を新設した。雪室は地下を掘って天井3メートルくらいの8畳程度の部屋に，約大体20トンから30トンぐらいの雪を，2月下旬から3月上旬に詰め込んで，まさに天然の冷蔵庫をつくる。雪室の隣には食肉専用の熟成庫がある。これは国内唯一の食肉専用雪室だと思っている。雪のエネルギーでお肉をおいしくするスノーエージングを行っている。今電気代が高騰している中，雪のエネルギーで肉を熟成，おいしくするというのは，まさにSDGsの取組ではないかなと思って

いる。弊社は新潟和牛をメインに販売し，特に新潟和牛でもA5等級という最高級の肉を扱っており，その肉を雪室に貯蔵して熟成させておいしくしている。雪国ならではの雪の力を使って，最高級品の本格和牛熟成肉を作ろうとしている。ゆきんこマークは雪温貯蔵という商標をとり，弊社のロゴマーク，ブランドマークとして展開している。

林茂男市長：南魚沼の雪は，里山の雪というか，温かみがある雪。これらが見直されると思う。そのときに食は切り離せない。そういう意味で，本日のパネリストのような方々にいろんなことにチャレンジしてもらっていることが，この地域を高めていく。そして物語を築いて，皆さんに感じていただく。本当にすばらしいアイテム。これなしには，観光はあり得ないし，この地域を語れない。いろいろな方々が今チャレンジしてくれいてることが本当にうれしい。ここは子供たちが流出している地域。地方創成というのは，その問題に立ち向かってるという気持ちがずっとある。ここに生まれてよかった，そして一旦出ても帰って来られる，そして，ここで産業が起きていくことを願っている。その元は，どこからの借り物ではなく，我々が持ってる宝物を磨き上げるということで，SDGsや脱炭素の面からも風が吹いてきたと思う。

小泉進次郎氏：オリンピックのときに南魚沼市さんが東京に雪を売りたいんですと私のところに来られた。私は環境大臣としてこれは面白いと。今までだったら，雪国で負担と感じていたものが，これからは地域の経済の，成長の源泉なんだ。そういう時代に入ったということを，どれだけ一人一人，また地域，そして国あげて前に進めていけるか，それが出来た国が，地域が，世界の中で成長の機会を最も掴める。そういう競争に入った。今COP27としてエジプトで世界の気候変動対策を議論されている。その会合と比べても10回上回ってるのがこの雪シンポジウム。まさに雪のことを活かして，新潟を含めて，日本全国の雪国，それと世界の中での雪国特に北欧とかとこの雪シンポジウムがつながると面白いんじゃないかなと思っている。

上村靖司氏：雪そのものは，熱量に換算すると価値はそこまで高くない。我々が行き着いた結論は，雪を使って，雪プラス食っていう食のほうの価値を高めること。それが今ビジネスとしてまさに成功し始めてる。だからこそ今，雪と食の産業集積がここで起こり始めている。実は魚沼市と南魚沼市で，合計12の雪室施設がある。雪を入れる米倉庫もある。お酒の倉庫もある。最近の話題でいうと，お菓子のメーカーさんがカカオ豆の貯蔵用の雪室をつくった。雪室で本当に旬の時期を過ぎても持たせられるという強みは，実は30年前からわかっていたが，最近では農業生産でも活用事例が出始めている。例えば新潟のキノコ産業は非常に強いが，1年間きのこを出荷しようと思うと夏の冷房や冬の暖房の光熱費はすごい。その夏の冷房に雪を使って，1年目からコスト的に安くなったという事例が出始めた。農業，農産物にもいいけれども，農産物をつくるプロセスでも役に立つというところも今チャレンジが始まっている。この南魚沼それから魚沼エリア含めて，世界の最先端の雪と食の産業クラスターの集積が始まっている。こうした産業が起こっていくということで，みんなが誇らしく思ってもらえるような地域に育っていくものと確信している。

3. 基調講演「雪国から始まる，環境と経済が一つになる時代」

講師：小泉進次郎氏（元環境大臣 衆議院議員）

環境大臣になったことを契機に，地球環境を少しでも守る努力と，それに対する責任を果たすことが，我々の時代でやっておかなければいけないことではないかという思いが自分の中でものすごく強くなって，この問題に取り組んでいる。南魚沼の皆さ

小泉進次郎氏による基調講演

んにとっても，地球温暖化によって，もしかしたら，うちらの時代は新潟でスキーが出来たよね，スノーボードも出来たんだよね，もう出来なくなったねっていう未来になるかもしれない。今日私が今からお話しすることを通じて，今日から明日から何か一つでも行動が変わって，よりよい未来へと動き出していこうというきっかけになればうれしい。

ちなみに，この新潟県内で脱炭素先行地域として認められたのが，佐渡市と関川村。今日のお話聞くと，雪氷熱とか雪の活用を徹底的に磨いて，南魚沼はこれでいくんだっていう方向になれば，南魚沼が次の地域の先行地域に指定されることも全然非現実的なことではないと思っている。新しいまちづくりをやっていくときに大事なのは，地域の皆さんの理解と，そういうまちづくりのほうが魅力的だと思ってもらえるかどうか。私はそういう方向性の国造りや地域づくりを全力で後押ししたい。

私は今日，雪の話を聞いて大変勇気づけられた。地域が持っている課題をいかに武器に変えていくか。こういったことを1個1個やっていけば，必ず地域社会はもっとよくなるし，まさに雪国から始まる環境と経済が一つになる時代が来る。政策的な言葉を使えば，これからは脱炭素の時代，カーボンニュートラルの時代。言い換えれば，地産地消の時代。既に環境をめぐる大競争が世界で始まってる。そこを取っていければ，人口が減っても，次の時代は今よりも豊かで環境にも良い，そんな地域経済国造りができると思う。この地域でそのような取組が生まれることを期待している。

4. おわりに

小泉氏は講演冒頭，新潟県との意外な縁を披露してくださった。五泉市で開催した昨年の雪シンポジウムでも話題になった，2度の雪崩から主人を救出した忠犬タマ公との縁である。新潟県出身で横須賀在住の方達が忠犬タマ公の美談に感動し，タマ公の慰霊碑を建立した際，当時の横須賀市長であった進次郎氏の曽祖父が揮毫してくださった事が縁で横須賀市と五泉市との交流が続いているとのことである。横須賀を地盤とする日本の若きリーダーとして人気の高い小泉氏と雪国，新潟との意外な繋がりを聞き，一気に講演に引き込まれた。また，雪シンポジウム当日は，世界の気候変動対策を議論するCOP27がエジプトで開催中であり，小泉氏の講演もパネルディスカッションの話題も，時宜を得た示唆に富む内容であり，雪の持つポテンシャルに改めて気づかされた。

雪がエネルギー問題や環境問題から地域を救い，食や観光を通して地域の価値を高めて雪国の優位性を発信できるのではないかと，勇気づけられるものとなった。COP27よりも10回上回ってる，この雪シンポジウムが少しでもお役にたてるよう，当会としても貢献していきたい。

最後に，本シンポジウムの開催にあたって，共催していただいた南魚沼市をはじめ，ご後援やご協賛をいただいた企業・団体の皆様，そして大会の準備や運営に多大なご尽力をいただいた実行委員会，幹事会，事務局の皆様にあらためて感謝したい。特に精力的に準備を進めていただいた事務局の南魚沼市役所の皆様に感謝申し上げる。

本文中の写真については，一部を除き，事務局である南魚沼市の方々が撮影したものを使用させて頂いた。